

ほんとに円高？

新年おめでとうございます。今年は暦の関係で年末年始休暇明け後すぐの連休となりました。毎年思うのですが、成人の日をわざわざ月曜日にして連休にする意味があるのでしょうか？休みたくてもなかなか休めない中小企業も多いはず。それと、土曜日がからむと当たり前に「3連休」などという報道が目につきます。大企業や役所は週休2日制が定着していますが、中小企業では毎週土曜日にきっちり休める会社はまれです。大企業や役所の慣習がすべての職場が休みであるかのような報道にはいつもながら違和感があります。

「不況」「不景気」という言葉、ここ数年よく飛び交って挨拶代わりに使われています。特に今の不況はサイフのひもが固い「消費不況」と一般的によく言われています。しかし、1月7日付けの日本経済新聞で、「女性」「東北」が消費けん引との見出しの記事があり、内容を要約すると、小売業の業績が好調で、2011年3月～11月期決算を発表した上場46社のうち、35社が経常増益を確保し、そのうち16社が2012年2月(大手小売業は2月決算が多い)通期で過去最高益が見込まれ、個人消費も底堅さを映し出すとのこと。

さらに詳細を見ると、コンビニは生鮮品や惣菜に力をいれ女性や高齢者の取り込みに成功し、スーパーやホームセンターは東北地方の復興需要が増益に寄与した、そうです。百貨店は宝飾・貴金属などの高額品の販売が好調で、昨年からは始まった個人向け国債の償還マネーが消費に回っているのでは、との観測があります。

私らが関与する中小の小売業の実感とは程遠いこの記事、私はこの記事をみて「これほんとに日本のこと？現在の内容？」と思いました。消費そのものはそんなに減らずに特定のお店にずいぶん偏っているということなのではないでしょうか？それに、1ドル70円代の歴史的な円高が定着した今、かつてよく行われていた「円高還元セール」はすっかり影を潜めました。

さてその「円高」とは「不況」と同じくよく飛び交っている言葉ですが、ほんとに円高と言えるのか？つい5年程前は1ドル120円位で、それからすると今の水準は40%位円高水準になります。しかし視点を変えて「実質実行為替レート」でみると、円の総合的な実力はここ十数年一定で、「円は決して強くなっていない」ことを意味しています。

「実質実行為替レート」とは、各通貨の総合的な実力を示すために国際決済銀行が算出している指標で、58の国・地域の通貨を対象にインフレ調整後の為替レートを相手国との貿易額をベースに加重平均しているものです。わかりやすく言えば、5年前はアメリカで1ドルのものを買うのに120円要したが、今だと77円で買える計算ですが、これは単に円が強くなったのではなく、日本がデフレで物価が下がり(お金の価値が上がる)、アメリカがインフレで物価が上がり(お金の価値が下がる)、その差が約40%広まっただけ、という見方が出来るということです。

今の円相場が適正水準かどうか、「購買力平価」という「ものさし」で計ると、1ドル81円位が適正水準となるらしく、そこからすると現在の水準はやや円高気味ですが、かけ離れた値でもないと言えます。あと、マクドナルドのビッグマックは世界中どこでも同じ値段であるとの前提で算出したビッグマック指数という「ものさし」で計るとどうでしょうか。日本円での値段は約2%割高というだけで、ここでも適正值に近いことを示しています。

このように、今の円の対ドル水準は数値だけ見ると右肩上がりで上昇していますが、別の角度からは適正な水準という見方もできるので、昨年中旬からの70円代定着というのは理にかなっていると言えなくもありません。これだけ長期化する円高では一時的な消費刺激策である「円高還元セール」は目新しさに乏しく、円高によって輸入品を安く仕入れ出来るというメリットの享受を継続できることも小売業の最高益に寄与しているのかも知れませんが・・・。